宗像

毎月一日発行
発行所
宗像大社
宗像会
福岡県宗像郡玄海町
電話玄海代②1311
定価一年送料共　500円

論説　紙の上の神

昔は神道者の家庭でも、子弟の結婚式を神前ではけわなかった。皇祖や偉人を祭る神社で、一家の私事を奏告し誓約することを遠慮する慎みかからであろう。神前結婚は近時の流行である。信仰があろうとなかろうと、新家庭成立の折目をつけ、公認を得る階程となっている。和風洋式のちがいでも、周囲のみんなも満足なら難しい理屈はいらない。

ところが、ある富家の子息が神前結婚に反対して、人前結婚と自称する型破りを強行した話を聞いた「老人達がいかにすめても、信仰しない神に誓いの詞は読めない。関係ある人々の前なら、それでよい」と、若い経済学専攻は遂に慣例に従わなかったのである。

かって学生の唯物主義者が、父の死にをいさかも悲しまず「おやじの肉体が科学的変化を起しただけだ」と放言して、家族を驚かしたが、スターリンの遺骸が多くの供花におおれて、唯物史観の信奉者寺が厳粛な葬儀を行う報道を、彼は何と見ただろうか。宗教界の種々の護符や経典に、神の文字は書かれても、彼らの目にはそれは紙に過ぎないと言うのだろう。月世界に飛ぶアポロ乗員が、聖書を大切に身につけて発った心も理解できないだろう。

外国の宗教学者が奇異の感をこめて屢々指摘するように、日本民族は古くから神仏二つの信仰を、同一家庭に同居共存してきたのだが、幼時から家庭の慣習のままに説かれるままに、何の反発もなく仏壇を拝み神棚を崇めて成長する。だから、人生の大事としての婚儀も、信仰の対象なる神を特に意識しなくても、神前の行事に従う素直さおおらかさが養われた。

物質文明の進歩と共に、学問の世界も科学的研究が唱導されて、宗教学の分野でも、科学的思考の枠内に神を追究し、体験の中の対象として神を観察する論議に発展した。千差万別の民族の信仰現象を、数学の定理のように簡単に、科学的系に結びつけることの困難さは、宗教の定義自体が種々雑多に表現され、定義の数は哲学者心理学者の人数ほどあると言われていることが、これを裏付けしている。現代の宗教学や宗教史を学んでも、それは知識の糧とはならでも、神を知る手段とはなっていない。青年学徒が教壇の講義で、直ちに神を信ずる転機をつかむわけもないし、自我が強く心身に自信を持つ彼等に神は遠い。

然し、年齢的に境遇的に、意識になかった神の探求が始まることがある。特に錯雑性の加わる社会生活の中に、孤独感や悲傷感に打たれて神を求め発見することがある。その神観念は、宗教の定義の多種のように人によって異るであろう。文覚上人や西行法師が、安定した宮仕えの生活の中に起った事件に、窮極の人間孤独を知って、解脱往生の菩薩行に走ったことは、宮殿の栄華を偏れて祇園精舎に鐘を鳴らした釈迦仏法以来の定法、落城の悲運に弦月を仰ぐ戦国の猛将山中鹿之助は、天空に神霊を悟り主家再興に確信を得たとの異聞。近くは短冊にひとり数十日、大洋横断のみを科学的に検討し自信した青年が遂に無神論をただの理窟として捨てた帰来談。いずれも悲傷孤独の中に、愛情の灯を発見し、その情熱は酷な思惟判断を駆逐して神を見出したのである。それは紙上の神ではない。

滅びる悲運の主義に対する限りなき愛惜、洋上の孤舟に自らの生命えの愛着と家族縁者えの思慕、それは忘れていたか知らなかったかの神を発見する点火を誘う。ここに神の認識とその出発が始まるのである。

現代の教育は、科学的思考を強調した。日常の生活も、自然の人情いな自然そのものを無視して、人工的な色相に偏向した。酷評する人は、これを自然の原理に背く病体人間の人工作品と嘲笑する。だから自然の中に平穏を希い、人間の能力の限界を超えた彼方に、神を求めその啓示を待つ。釈迦や基はもとより偉大なる信仰の世界を開き、民衆の苦悩を救おうとした聖賢は、そこに強烈な意志を向けて刻苦した。意志ある処に道ありの悟道は、自然の原理への合致にあった。紙の上にも神はあるのである。

誰しも親鸞のような偉人にはなり難いが、せめて周辺になごやかさを与えるよう人間的でありたい。その心構えは鋼でも偽りでもない。人間の本質である。

神具、装束
結婚式場用品　株式会社　井筒

九州店　福岡市吉塚一丁目三五番三号（〒八一三）
本社　電話福岡（九二）六五一九五六番
京都市下京区油小路六条北入（〒六〇〇）
電話京都（〇七五）三四一三四四・三四一一三四四・代）〜四六番

第十八回宗像大社中津宮
七夕揮毫会要項決定す

今年で十八回目を迎える宗像大社中津宮七夕揮毫会の実行委員会による実施打合会が、去る六月十五日午後五時から中津宮に於いて開かれた。

この打合会で、同揮毫会の実施要項を始め、関連諸事項が種々審議され、左記の通り要項が決定された。この要項は概ね例年通りであるが、これはこの要項が同揮毫会のカラー、持ち味ともなっているため、これをいかすという方針に基づいたものである。七夕揮毫会もそれは夏の行事として地域の人に喜ばれ、良い子達にとって欠かせないものとなっている。

又関連事項としては、受入体制の問題や台風など突発事による善処問題等が主に議題となったが学校側も渡海船側も例年通り万全の態勢を取る、又突発事故が生じた場合、すみやかに関係団体と連絡を取り人員等の変更を参加者にお知らせすることを決め、本年の七夕揮毫会実施の運びとなった。

要項

一、応募資格　幼稚園児童・小学校児童・中学校生徒
一、課題　小学校
幼・一年　い　け
一年　配所の月（横書）
二年　そりはし　二年　都府楼跡（行書）
三年　星まつり　三年　観世の晩鐘（行書）
四年　心字の池
五年　文字の神
六年　青山白雲
一、規定
(1)字詰行数は随意。
(2)和半紙（普通型）を使用。（規格半紙は不可）
(3)学年、氏名は自書のこと。
(4)校名は代筆、又は校印にて可。
一、席上揮毫　七月二十一日（土曜日）
◎受付時刻、開始時刻、便船の発着時刻等は後日通知します。
一、参加料　百円　当日作品提出の時。
一、審査　当日、中津宮にて厳正審査の上、発表します。
◎賞規定（出品点数により変更する事もある）
幼・小学校一、二、三、年　特選一名　準特二名　金賞五名
銀賞十名　銅賞二十名　秀逸四十名
四、五、六、年　特選一名　準特二名　金賞五名　銀賞十名
銅賞二十名　秀逸四十名
中学校一、二、三、年　特選一名　準特一名　金賞三名
銀賞五名　銅賞十名　秀逸二十名
。各学年を通じ、最優秀賞として小学生一名、中学生一名に宗像大社宮司賞を贈ります。
。各学年特選者、準特選者には夕刊フクニチ賞、尚文堂賞、福岡書道会賞、ヒロカネ賞が贈られます。
。金賞には中津宮賞、銀銅賞、秀逸佳作には賞状を授与します
一、表彰式　当日、午後四時から中津宮にて行います。
一、審査　福岡教育委員会

主催　宗像大社中津宮
大島村教育委員会
夕刊フクニチ新聞社

御知らせ

左記の通り夏まつりを執り行いますので多数御参拝下さいます様御案内申し上げます

記

七月三十一日、九時　筑前地区中学校奉納相撲大会（当社相撲場にて）
五時　茅ノ輪神事、及び人形祓

阿蒙少言

家門の誉、先祖の面目などの台詞は、既に時代ものになって通用しそうな時勢ではないが、縁談には多少のウエイトを占めている。或る多人数家にその先祖の事蹟家系の調査を頼まれたことがある。「子どもの結婚の飾りですよ、家柄で飯は食えませんからね」と調査書を渡した時のご挨拶。○実力主義の世とは云へ、先祖の遺した無形財で食っている者も居る。新しい思想を自負する者は、否定しながら都合のよい面だけには家柄を暗にほのめかす。無力無能者の理論と現実の矛盾が痛ましい。人間界の優劣が醸し出す栄枯盛衰は苦味がある。○家元、本家、正系などは宗教や芸道の看板に、現代も生きている。飯の種にもなっている。草子類のレッテルに元祖や本家など家門の誇りを自讃、中味は伝統と新味もないお粗末では、食って寒心の至りというところ。○名おなき一介の商人が、粒々辛苦して産を成すと、欲しくなるのは華族になったが、名だたる門地は無力では維持困難、そこで家格の欲しい成金屋に財力の助けを求める骨董家の縁結びとなった。娘は家名と財力の取引の犠牲になって売買同然、多くの悲劇を演じた。○名と力の相求め相補う取引は、今日でも折々見聞するが、作家又人の原稿紙にはあまり引かれない。天は人の上に人を作らぬが、実力主義が無能無力を左右して、人の上に人を作り人の下に人を作る世相と逆げ難いことかも知れない。○貧しい無学の農夫や漁民の子弟が、一流の大学を卒えエリート・コースを進む。村の旧家三流四流の裏門を敲いて、窓気地なしの標本となる。前者はトンタカ、若い人が商が生んだ鷹の意味を略して、こんな語句にしているとか。（白雲）

第一四四回　宗像大社歌会詠草

毎日十五日〆切　詠草到着順

田久小方実
互選弾む神社歌会のテーブルに巫女供応の御茶あたたかし
曲天野トモエ

三毛猫の親子抱き合ひねるそばに心なごみて衣縫ふなり
東郷藤崎辰子

フロント硝子に流るる霞のましろきを眼に追ふ幼何を思へる
名残竹原圃

裏庭は山につづきてホトトギス今日も来て啼くトクキヨ、キヨカ、キヨクと
深田中野節子

大寒の空晴れて舞ふ鳶のあり豊なる翼はばたきもせず
福岡桜井ツ子

この年も健やかにありてふるさとの桜蘭の日を友とつどひぬ
田久立花勇雄

延々と続くレールも赤錆しストで運休の踏切りに佇てり
田島吉武武雄

春雨に水玉光る蜘蛛の巣にあるじはいずこ姿も視えず
徳重石松やす子

夏柑の花に群がる蜜蜂の去りて何時しか香りうせにき
原町八波五月

今一歩踏み出す勇気なき孫は只立つよるこびに目を瞑かす
東京花田文五郎

応接間の一鉢気品あり粗茶こいつぶくと名菓を添えて
大井安部重郎

門畑に小綬鶏の親子つれだちて我が足音に逃げるも可憐
大井安部静子

萎摘むと畑に出づれば小綬鶏のふいに飛びたつ親子連れらし
津屋崎占部由久

長病みて無為の暮しの今更に惜しくおもう時の記念日に
武丸立石ろせ乃

老いたれば身の麗にせよと娘に言はれて上濃きめに口紅をぬる
福岡江崎琴子

今年まで樹々のしげりも深々とやがて枯れなんあの木この木も
宮田北原君子

遠き日に村人こぞりて拓きたる山の茶園も住宅街となる
津屋崎菱花女

水郷のお茶の銅屋根青錆びて青葉がくれに見るも懐かし
田久小方実

日照雨降る畦道に立ては蛙の声土の中よりくくみ聞ゆる
福岡吉田信夫

行きずりの人のゆかしゃ声かけてわが家の嫁に請ひたきものを
日の里安部さつき

臥しおれば障子きしみてすき間より孫の小さき笑顔がのぞく
久留米篠田太郎坊

あんたは働くばかりだったねと働かせし妻が重症に独りごつ
光岡河村久光

雨ふると知らずながらニュース聞き気づける時雨はぬれおり
吉武早川須磨

こころあつき友のたまいしこの新茶尊げく匂う今朝の食卓
熊本小野かをる

夢きめてなほまさり来る失恋の心にしみて夜半の雨降る
津屋崎麦野時雄

大実ぐみ房々熟りて朝夕に庭めぐるたびちぎりてふくむ
宮田片山一

現なる心の底に空しさを夢に顕ち来る若き日のこと
田熊鷲津かつ代

花がうを踏みて気づかぬ杉の秀にからみて高き藤の花房
戸畑藤井孝子

日々の心こめたる食卓も物価高にてや、淋しけり
吉武白木うめの

二日程の旅より帰りな濃も食ぶる吾家の飯の実味かり
宮田片山朔子

二、三分に咲き揺れている夾竹桃女住む町の駅のホームに
茨城渡辺千恵子

流行のコートまとひし夜学生社内旅行にいきいきと発つ
戸畑田中ハツセ

寝不足の鏡中のさえぬ顔白く厚目に化粧をしたり
土穴神谷太々子

バラ寿司の食卓淋し別居せし子の好物と妻は語るも
津屋崎内田久美

四十雀の啼音一きわさやかなり玉垣の中に草取りおれば
武丸原田リノ

拡音機に吾を呼び出す大声につづじのかげの小鳥飛立つ
八幡安川浄生

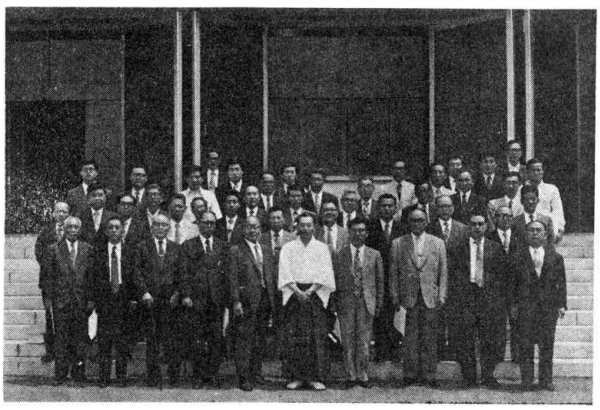
大阪府神職会一行来社

―住吉大社を始め三十余社―

六月四日、大阪府神職会一行（住吉天社、副野憲氏外四十五名）が当社及び中津宮にそれぞれ参拝見学された。

一行は、阪急フェリーで九州入りし、関門架橋を見学、貸切バスにて正午頃当社参拝となった。正式参拝の后、復興なった境内を興味深く見学、続いて宝物館に於て沖ノ島神宝の数々に至極感銘されていた。午后二時に次の参拝地、大島中津宮に渡島、青い海と緑に囲まれた離島・大島を満喫し、四時頃神湊（魚屋旅館）に荷物をほどき、海岸の景色を望観しながら玄海の美味しい海の幸に舌づつみを打たれ一夜を過ごされた。

翌日は、宮地嶽神社、香椎宮、箱崎宮と順路参拝されながら福岡にて解散の運びとなった。



相つぐ老人パワー

―老人大学や高砂会参拝―

去る六月二十三日、福岡県教育委員会主催の宗像地区老人学講座（生徒数四十名）が、当社の歴史と沖ノ島出土神宝見学の為参拝され、福岡教育大学波多野皖三教授の説明のもとに熱心に耳をかたむけられていた。

この大学は、教養、園芸、文芸文化財の各コースに分かれ、各自自由に撰択出来る様になっており毎週土、月曜日毎にそれぞれの講師を招いて研修を行っている。

文芸、文化財コースでは、郷土の歴史や文化財、民謡、俳句等の研修を行っているが、この日は特に当社の歴史と文化財の見学となった。沖ノ島学術調査にも参加された波多野教授の講義に続き、当社の"神々はよみがえる"の映画観賞、宝物館は沖ノ島出土の国宝の一点一点について質疑応答が活発に行われた。

今まで知らなかったことを発見し、自分たちの郷土の文化遺産を把握出来、郷土の良さを自らの目で確かめることが出来たと大変喜ばれていた様子であった。

当社参拝を終えた大学二行は、別格本山鎮国寺に向われた。

又七月一日田島校区―高砂会（会長清水貞夫）の会員五十名が当社月次祭に併せて参拝され、宿舎で の映画観賞及びお茶を飲んで親しく談笑された。

なお既報の通り、当社の記録映画として「神々はよみがえる」「沖ノ島」「題名のない音楽」「神々の音を求めて」の四本が保管され、当社に於ける上映を始め、各地の団体にも職員が出向して上映し好評を載いておりますので、御希望の方は遠慮なく当社社務所まで御申し出下さい。

なお上映時間は「沖ノ島」のみ四十分で他は三本共三十分、カラー。

沖津宮拝殿幕奉納

八幡宗像会

去る六月二十四日、八幡宗像会会員八十余名がバスで来社された。まず祓舎でお祓いを受けた後、一同拝殿前に整列、岡崎脊雄会長に合わせて参拝、引続いて沖津宮拝殿の幕を奉納された。当社葦津宮司が、

「沖津宮幕一張り受領いたしました。沖津宮の祭りの際、拝殿に張りたいと存じます。八幡宗像会皆様の御厚志に対し御礼を申し上げます」と挨拶した。

八幡宗像会では、毎年夏季総会を宗像で開催することにしており、今年は当社に参拝後、鐘崎で開かれた。

郷土出身者が各地で宗像会を結成し、活発な活動を行っているが、その中でも特に八幡宗像会は会員一同熱心に行事計画を立て各方面に於て活躍しておられる。

献魚「大しいら」二匹

―鐘崎・福神丸より―

去る七月四日、午前十時、鐘崎福神丸（石橋勤氏外八人乗り組み）より大しいら二匹が献魚された。

福神丸は現在、沖の島周辺にしいら漁に大忙しで、沖ノ島勤務の職員も時々戴いては食事に供している。

しいらは、七月から十月にかけて が時期で八月が最盛期であり、その頃まで卵を持っている。

現在、鐘崎の船団は、いっさきぶり（沖ノ島周辺）いか、あじ、さば（鐘崎近海）に勢い良く船足を進め、町は活気を呈している。

「しいら」

シイラ科の魚で、一般にシイラ、三崎でトウヒヤク、関西地方や高知でトウヒヤク、熊本でマンビキ、福岡でマビキともいう。

全長二米までなり、暖海に広く分布し、外洋性で活発に遊泳する。

肉は刺身或いは塩乾品として喜ばれ、特に山間部においては重宝がられている。

宗像郡内各寺寺宝展開催

―当社宝物館にて―

当社秋季大祭（放生会）の行事の一環として郡内寺寺宝展を開催する。

神郡宗像には、当郡内最古の開山である鎮国寺を初めとして、五十有余の寺院があり、国の重要文化財に指定されている平安時代からの数々の貴重な宝物が所蔵されている。

今回は、宗像郡仏教会を初めとして各寺及び関係団体の御協力を得て、これらの宝物を一堂に集合し、郡内をはじめとする参拝者に観賞して戴き、郷土の文化財を再認識して戴くと共に保存に対する考えを新たにしようとするものである。

最終的には、この特別展を基として寺院址及び各寺の宝物台帳を作成し、小冊子にまとめることを目的とするものである。

一、期日　十月一日～十日まで
一、場所　当社宝物館
一、主催　玄海町、津屋崎町、福間町、宗像町、大島村の各教育委員会
宗像大社

漫筆明暗箱 (5)

千木高知るお嬢さん学生

「国文学を専攻する君たちに、大学が神道思想を学ばせるのは、各時代の文学的作品に神道を中心として仏教、教えの他思想が、絶えず織り込まれているから、時代の生活の中にきてきたは別として、現代まで庶民の信仰神道の歴史を理解させる為である。生きてきた神社の多くは、古事記や日本書紀にある神代の神々を祭神としている。従って今日の史学が論外におく神話に、民族思想テキスト に用いる必要もないので、諸書を要約してアウトラインを順を追って印刷配布する。

手数はかかるが、週一時間半の補助科目ならこれがよい。学部三年の国文科学生、出席率は良好で折々は英文科の学生もきた。講義が面白かろう筈もなく、話しぶりは勿論下手、四単位が英に取れるとの他の思想ことがミソらしい。

「菅原道実公を祀る天満宮なども、時代の生活の中に生きてきた神社の歴史を理解させる為である。記や日本書紀にある神代の神々を祭神としている。従って今日の史学が論外におく神話に、民族思想の源泉を探究するわけである」と、一般宗教史と異る神道の特色に、念を入れた解説が付けられねばならない。

神話とは文字のない時代の書かれぬ小説である。わが民族の祖先の生活の中にあった事実を、理想化し小説化して語り伝えたものと みたい、と学生のレポートに述べた意見は、興味ある論旨として印象に残る。神話教育は非論は賛成の学生が多かった。

先生も調子に乗って、尾崎紅葉の金色夜叉を引き出した。明治文学の代表作と讃えられ、当時若い女性の紅涙をしぼったと聞くが、熱海の海岸には貫の松が名所的に残っている。この小説のモデルはどうであっても、当時の社会的背景には、出世主義・金権主義が渦巻き、これに対する青春の反骨も讃美されたようで、登場人物は実際に存在していた。神話に描かれた神々の姿も実際に背後にあったと考えられる」と、古事記や日本書紀が突飛な仮空な記述でないことを強調する。

金色夜叉と、書かれぬ小説神話との対照は、その比較論の方が突飛かも知れない。

「雲仙には真知子岩が、熱海には貫の松が、小説から抜け出して記念されているのですから、神代の物語の遺跡が方々にあって、信仰されることも肯けます」と学生が目縄自縛するのだろう「星辰の信仰の内、いくらか親しみのあるのが七夕祭。年にたった一度、牽牛織女の両性の星がデートする。年に一度だけと同情する要はない。幾千万年否もっとデートしているのだから、天の川の回数は今の青春男女の比ではない」と、白髪先生のデート論に納得の笑いが起る。居眠りも覚めるだろう。

鎌倉室町にかけて発展した種々の神道説については、哲学的要素を持つ中国思想や仏教々義に誘導されて、本来単純素朴な神道が哲学的色彩を無理に加えた観がある。学生の試験答案の大部分が、こう記述している。考えてみれば諸家の神道説など、お嬢さん達には縁遠いものであろう。

古事記伝の本居宣長を伊勢松坂の秀でた国学者と話しても、料理の講座で聞いた松坂肉の方が印象的である。女子大に四年の通学は、多くは結婚か就職の椅子付けが主目的らしい。よほど特別な心境の持主でない限り、多くは単なる道具揃えのための国文学科専攻と言えようか。

日本的女性を世に送り出す教育方針はよい。神主養成大学の学生が、授業料ならぬ学費値上げ反対のビラを張り廻して、教授を吊り上げる風景を見聞する昨今、素直なお嬢さん学生の聴講は喜ばしい。然し、日本的女性とは何か、掘りさげて自問自答してみたが、封建世代の貞女賢母はできないし又できる道理もないと、現代思潮が答えてくれた。（落花生）

神湊（こうのみなと）

大内弘世　その一

楠早鳥作
福田長庵画

(31)

「新探題殿御赴任のことについては委細承知した。防長海賊については芸芸方の下知のままに動かせるが、芸芸の海賊は向背だならぬものがあり亦多年の当家との確執のこともあるのでしかと返答しかねる。今后の其方の才覚により取計え」

大内弘世、時に年五十三才戦場往来の間にきたえた胆には自づから人を威圧するものがあった。明継は低頭して聞き流り心もち頭をもたげて、

「御諚謹しんで承りました。いずれ近く彼地へ渡り芸芸の海賊衆とのわたりはつけ申しましょう。されど万一この計略の叶わぬ時は御当家の水軍によって芸芸海の賊衆制を賜りたい」

と申し述べ弘世はこれに快諾を与え対面は完った。

弘世と近習が立ち明続は平伏してそれを送った。案外に弘世が去ると明継はこの度の任務がとどこおりなく行われたのを感じ一つ大きく肩で息をついた。

と、控の間から武士が一人近よってきて、

「宗像殿の使者へ御館より酒肴を賜る由で御座いますので拙者ねているが貴僧、許六という船頭を御存じあるまいか」

と告げて先に立った。守護所を出て客殿の一室に通されるとほどなく弘世が僧を一人伴って着座した。

「宗像殿の使者へ引合そう、これなる者は明国の使で赴秋と申す先年来より海賊共の跳梁に手を焼き、その取締り方を九州の在西府に頼みまた足利将軍へも鎮圧方を願いに赴く途中当家へ酒肴が侍女によって運れ酒宴が始った。数度の献酬の后それまで黙然としていた僧が弘世の方を向いて滔々と明国創業の歴史を語り始めた。弘世はそれに耳を傾け明継は知らぬ体で盃を口に運んでいた。

「――その張士誠なるものの遺児確か築前宗像で没したと聞き及んだが、どうやら話に聞いた面さしがこの御使者に相似ていると思いますが如何かな」

と言って明継の眼をのぞきこみ突然朗々大笑し

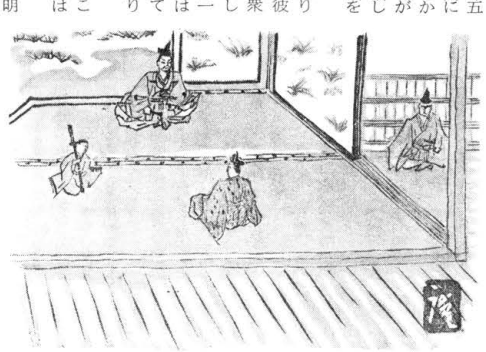
「いや戯れごとで御座う、一度死んだ者が生きかえるものではない」

と打消したが目は鋭く明継を見つめていた。

「実は、いささか身寄の者を尋ねるならばこれは願ってもないことと、

「折角の御親切有難くおうけいたします。妻もなれぬ長旅で疲れたる様子、まことに恐悦至極に存じます」

と丁重に礼を述べほとなく席を辞した。あとに残った弘世と赴秋は互に先ほどの詩文の上に瞳を交えていた。



西風落葉雷静
暮雨欲来僧未帰

と続け赴秋に返した。赴秋はこれを吟じ

「題は何としたものかな」

と問いかけた。

「南明秋興はいかがですか」

打てば響くような明継の答に弘世は感じいり口調を改めて、

「貴公暫くこの館に滞在されよ、先刻の使者の口上といい只今の詩文の技といい並みの人物ではない。これほどの才幹を抱える宗像殿と手を握るは当家にとっても重畳至極、旅宿では何かと不便もあろう。御妻女ともども館へお移り願いたい」

今后、再び弘世と話合いが出来ないうちに明継は旅宿に残して来たばるの顔を想い浮べた。

一刻の歓談の后、赴秋は紙筆を乞い、

金玉楼台擁翠微
南山秋色雨交輝

としたため明継の前に置いた。一読し明継は、

「題は何としたものかな」

と問いかけた。

「南明秋興はいかがですか」

打てば響くような明継の答に弘世は感じいり口調を改めて、

「貴公暫くこの館に滞在されよ、先刻の使者の口上といい只今の詩文の技といい並みの人物ではない。これほどの才幹を抱える宗像殿と手を握るは当家にとっても重畳至極、旅宿では何かと不便もあろう。御妻女ともども館へお移り願いたい」

今后、再び弘世と話合いが出来ないうちに明継は旅宿に残して来たばるの顔を想い浮べた。

一刻の歓談の后、赴秋は紙筆を

しい物を売って行く、これが当家の串崎あたりの海賊と異り目きき が優れているので彼奴の物は宗でも珍重がられている」

そうか許六は才市と一諸にまた仕事をしているなら、大内と交易しているならその中に会うこともあろう、明継は旅宿に残して来たばるの顔を想い浮べた。

×　×

海に突き出る大駐車場

―神湊に町営工事進む―

青い海と空、海岸線の白い砂浜、左右に続く"さつき松原と勝浦海岸"自然が作り出した美しい景観。この玄海町は神湊波止場側近にいま着々と町営の大駐車場建設工事が進められている。

この駐車場は、広さ約二四〇〇坪、納車台数は普通車で四〇〇台、小型を入れれば五〇〇台にもなるという大駐車場である。

現在完成を十一月末に目して、急ピッチで埋立てが行われている。

玄海町えの観光客は年々増加をたどり、昨年度で約一五〇万人と一〇〇万人ともいわれている。

自然が少なくなって行く今日、神湊は人々のオアシスとしてますます愛し慕われていくと思われる。

建設の意図は、神湊は小さな港観光客の増加を見、旅館も大小二〇数軒を数え、駐車場の不足が最大のなやみとなり、これの解消のため、この町営大駐車場の建設となったのである。

工費約五、〇〇〇万円を要する大事業であるが、完成が一日も早く待望されている。

完成した暁には、海岸を子供の手を引きながら、波とたわむれあう親子や、若き男女の青春が繰り広げられるであろう。

工事が一日も早く無事に終わることを念願したい。

写真は神湊船着場より見た旅館街、中央左側に突き出たところが駐車場の先端

話題の新車をみる (五)

ルーチェ・新AP車の巻

東洋工業は、昨年発表と公害対策車すなわちマツダ・リーブス採用のルーチェAP1を更に改良したルーチェAP2を六月四日より発売した。

環境庁設定方針による日本版マスキー法は五十年より実施されるが、この規制は有害ガスの排出量がキロ米当りCO二、一g、HCO〇、二五g、NOx一、二gという極めて厳しいものであるが、ルーチェAP2はこの五十年規制をクリアした最初のモデルとして先頃、運輸省と環境庁から「低公害車第一号」の指定を受けた。

さらに通産省が低公害車の開発普及のために推進している「低公害車優遇税制適用第一号」の認可を獲得。従ってこのモデルを購入する際、四十九年三月迄は物品税の1/4、登録時の2%が免除され、四十九年四月より四十九年九月迄の間は物品税の1/8、取得税の1/3が免除されることになっている。

この特典により価格面に於て憂慮されたAP車も、ルーチェAP無対策車に比べて、現在のところ二万二千～五千円増の負担ですむことになる。

車種は、二二五PSエンジンのハードトップGSⅡ・カスタムGRⅡ、二二〇PSエンジンのカスタムGR・セダンGRの四車種で、全てREマチック仕様である。

因に運輸省のテストによるルーチェAPの排出ガスレベルは、二二〇PS車でCO一、一g、HC〇、〇七g、NOx、〇四五g。二二五PS車でCO一、一Hg、CO、二g、NOx、〇、四二gでいずれも五十年規制値を大幅に下回る記録的なデータを示した。

ロータリー・エンジンの特徴を生かしたマツダ独自の公害対策システムを東洋工業では"マツダリーブス"と名付けているが、その特徴はもともと窒素酸化物の発生が少ないREとサーマルリアクターを組み合わせたもので、燃焼室から出てきた排気ガスに新しい空気を吹き込みHCやCOを再燃焼させて無害の炭酸ガスや水蒸気に変えるというシステム。触媒式浄化装置のように重金属による二次公害の心配もなく、無鉛ガソリンにも加鉛ガソリンにも影響を受けないことである。

ボディスタイルは、従来のルーチェシリーズと全く同様の大胆なデザイン。インテリアは、カラーインテリアを始め、AM・ステレオ・ウインドワッシャー連動間欠ワイパー(GRⅡとGSⅡ)、ステアリングロック・自動巻取式シートベルト・電磁式トランクリッドオプナー・サーボ付きディスクブレーキなど、かなりの豪華装備。

安全面に関しては、衝突時のショックから「ドライバーを守る衝撃吸収ハンドル、二系式マスターシリンダー、HPR安全合わせガラス、ブレーキパイプの破損を知らせるフェイルインジケータ、球切れを知らせるストップランプチェッカー等が、徹底して採用されている。

無線電話設置完了す

⁂沖ノ島・辺津宮間七十キロに⁂

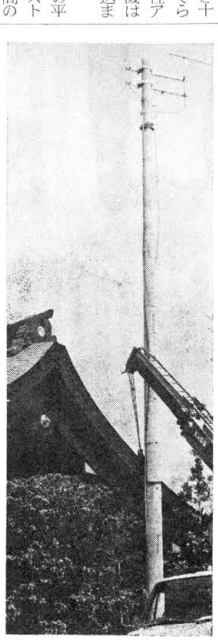
既報の通り宗像大社辺津宮と沖津宮間海上七十キロを結ぶ業務用無線電話設置工事は、六月下旬、辺津宮、沖津宮双方に於て施行された。

辺津宮では、祈願殿脇に高さ十五米のコンクリート柱が建てられ、その先端に五素子の指向性アンテナが取り付けられ、無線機は事務室の放送機器の中に組み込まれている。

一方沖の島では、社務所脇の平坦地に高さ十二米のパンザマストが建てられた。なお電力は夜間のみ供給となり、昼間の送受信はバッテリーによって操作する様になっている。

周波数は一四八・二五メガヘルツ、出力十ワットの固定回線である。受信感度は非常に良好で雑音もなく、離島との連絡が便利となった。

全国の神社でも業務用無線を開設しているのは当社が始めてである。



写真は祈願殿脇に立ったアンテナ

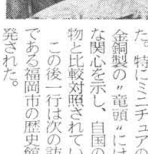
これで職員の交替時に於ける種々な連絡が可能となり、又心配されていた密航船に対する善後策が早急に取れる様になり沖ノ島勤務も一安心となった。

沖ノ島無線局並びに同局建設工事は九州電気工事(株)が奉納された。

沖の島神宝など見学

―中国文化使節団一行―

去る六月二十二日午前九時半、中華人民共和国出土文物展代表団(団長王治秋)外一行十一名が来社され、約一時間に渡り、社殿及び沖津宮祭祀遺跡出土神宝の数々をつぶさに見学された。当社の由来については宮司より、神宝に関しては沖津宮祭祀遺跡調査団(団長岡崎敬九大教授)より説明があり、千六百年の昔から大陸及び朝鮮半島との渡来品、又我が国の最大級の出土神宝に驚異の目をみはり「何時頃のものか」「どんな意味を持ち、何に使用したのか」などとメモ帖を片手に、熱心に聴き入っておられた。特にミニチュアの織機、金銅製の"竜頭"には大きな関心を示し、自国の出土物と比較対照されていた。



この後一行は次の訪問地である福岡市の歴史館へ出発された。

月月火水木金金

"海の男"を育成している県立水産高校(宗像郡津屋崎町)で夏季恒例の海洋実習が行なわれている。

参加者は一年生の百六十人。大海原に生きる男として必要な基礎体力、精神力を養わせようと毎日二時間半の猛訓に玉汗を流す。

科目は遠泳を始め、手旗信号、カッター、和船のこき方、救助法など盛り沢山、初日はまず、ふんどしの締め方や実習場所の清掃から始めた。

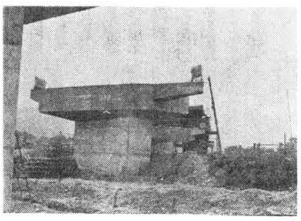
教室での授業から一挙に屋外実習、生徒たちはあたかも一人前の男になったかの如く元気な声を出しながら実習に励んでいた。

博多～大阪間日帰りも!

新幹線工事

四十九年末完成目ざし急ピッチ

東海道新幹線は、昭和三十九年十月一日、開業以来、輸送人員は優に四億を越え、現在は八分毎にダイヤが組まれ、一日平均約十二三万人を輸送している。



写真は粕屋郡久山町に延びて来た九州新幹線

この高速、安全、大量輸送と卓越した機能は、我が国の経済社会のなかで大きな貢献をなし、又全世界の注目を浴びたが、その新幹線がいよいよ九州にも延びて来る。

この九州新幹線は、岡山―博多間約四百キロのコースで工事費は約四千八百億円を要し、昭和四十九年十二月末完成を目標に現在着々と工事が進められている。

曲線半径、勾配、軌道等、東海道新幹線に比べてより高度な構造が設計されており、騒音、振動等にも最善の努力が払われている。

福岡市内の新幹線は、長谷、箱崎管下を経て弥永に至る延長約十七キロで一部盛土区間があるほか、ほとんど高架橋となり河中、道路、鉄路との立体交差が多く、鉱山地区もあり、埋蔵文化財の多いのも特徴となっている。

終着の博多駅は、現在の鹿児島本線博多駅東側(筑紫口)に幅約四十米、三階建ての高架式でホームや線路は現在のものより約三米高く、地上約九米の高さに作られ、出札室、待合室等は全て高架下に収容し西日本最大の駅となる構想である。

博多まで の新幹線が開通すると東京、大阪へも日帰りが可能となり、飛行機嫌い人には有難い新鉄道の登場となる。

宗像史蹟 (二)

蔦ケ嶽(城山) (一)

一、

蔦ケ嶽は芦屋ケ嶽と共に宗像の秀峰四家の一つで、海抜三三九メートル。その昔、宗像山、赤馬山、蘿ケ嶽、岳山とよび、現今では城山とよばれている、著者の宗像在住の節は荒廃な山麓であったが、その後、農土道場が建設されて一部が開拓され、やがて赤間出身の財閥、出光氏の並々ならぬ御努力により福岡学芸大学の誘致が成功して、蔦ケ嶽山麓に威風堂々たる鉄筋の学舎を今日現出している。

十二世紀戦国戦乱の世は許斐山と相対する山城で、天険に恵まれる要害の地として絶妙の城塞であった。筑前の碩学者貝原益軒は、当城を"当国無双の城也"と絶讃している。その遺跡は頂上の広大平坦な城地、石垣の跡らしき断崖、中腹各所の防御地砦など、ことに本丸より石丸に向う大手口の山腹は麓に向って急転直下した大路を止めている。

永禄年(一五六二年)十二月三日、城砦が落成すると、宗像大宮司第十七代氏貞は、直に入城した。それまで氏貞は峰つづきの北隣、白山に城郭を構えて居住していたが、偏僻の地で、領内に敵兵が侵入しても、急に援兵を出し難い不便があった。ことに前にものべたように豊後の大友勢が、しきりに許斐山城におしよせ、攻取る気配であったから工事を特に急がせ、永禄四年(一五六一年)七月下旬から普請をはじめて、明くる五年十一月末に大半成就したので、数日後入城したわけである。

当時の群臣の家は山上から山下に立ならび、赤間の町口吉富まで、商売の棚をならべ、城下町として他国に劣らぬ繁盛を極め、京都の四条、五条の辻とかわらぬと古文書は伝えている。今日蔦ケ嶽の山上より見下す当時の城下町のイメージは、宗像の人々には、尽きせぬ回顧の情をそそることと思われる。しかしこの城塞も天正十五年(一五八七年)豊臣秀吉の九州征伐の帰途、一日蔦ケ嶽城に入り「明年必ず破壊すべし」と厳令したので、ついに矢倉を下し、石垣を壊し、さしも天下の堅城とその名を誇った蔦ケ嶽城も廃城となった。

その節破壊された瓦石は山上に散乱して、四百年前の往時を偲ぶよすがとなっている。

貝原益軒「古城誌」の蔦ケ嶽城について次のように記載している。

『城址本丸二段許
大手口南に向う
石丸村の方に在り
東二の丸二段
水落の谷と云所也
三の丸　白岩水谷と云う
其外出丸所々に在り
本丸より西にも曲輪有』

(つづく)

田中政喜著

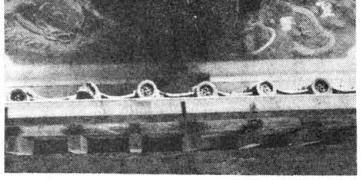
酒処

「豊盛」本舗豊村酒造有限会社の巻 (6)

今回は宗像郡内第一の聚落、津屋崎町に於いて吟醸銘酒「豊盛」醸造元豊村酒造有限会社を訪ねてみた。

津屋崎の遠浅で長く延びた海岸線は海水浴場として絶好の立地条件をなし、文字通り白砂青松の環境で、八月ともなれば各地から訪れる海水浴客で海辺はたがい咲いたような賑わいをみせる。このように風光明美な津屋崎の地で「豊盛」が醸造されている。

扨て「豊盛」の沿革によれば、約四～五百年前、鞆屋郡新宮湊において「豊宮屋」の屋号にて酒造業を創設した。明治初期になって先代豊村喜三郎氏が、この津屋崎の地に分家し酒造業を創立、合せて製塩業、郵便電信局をも創設した。



氏は宗像銀行、活洲軌道、醸造試験所等諸会社の重役をも歴任された。次いで明治二十八年には醸造数も三千四百石となった。当時の全国酒造家の最高製造石高が九千石であったと言うから、福岡県は もちろんのこと全国的にも有数の酒造家に成長したのである。大正八年、宮地岳山麓に第二工場を新設し、両蔵で五千石を醸造。昭和十二年日支事変に突入すると産業は戦時体制下に入り、酒造りも統制の下に製造石数を規制された。さらに全国に七千軒あった酒造家を企業整備の名の下に強制合併させられ、半分の三千五百軒に削減されると共に、公定価格制度が実施されるに至った。

「豊盛」もこの企業統制を受け、第二工場を休業し第一工場のみで製造。昭和二十七年現称号に経営組織を変更し今日に至る。

酒造原料米は、酒造米と定評ある福岡県糸島の山間地の大粒酒造好適米を使用、酒造用水は見山山麓の豚々と湧出る山水を使用。原料処理としては連続蒸米機、自動制御機等最新式省力的機械を導入している。

現社長豊村喜久郎氏は、広島高等工業醸造学科出身で福岡県酒造組合香椎支部長、同協同組合長、同公害対策委員長等を歴任され多忙な毎日である。

(写真は、古くは酒造家の看板のように使われていた杉の葉が材料の「酒ぼこ」。関西では「猶林」とも云う。

宗像大社歌会

俳句作品集（二六）

福岡　入江　柳江

葉さらやノミと鉋にひと日暮れ

大井　安部　重郎

谷の戸の戸毎戸毎の柿若葉

津屋崎　菱花　女

水郷の水蘇り蛍飛ぶ

東京　小浦　太平

住みなれて池の薄暑も佳しとせる

久留米　篠田太郎坊

柿の花散り敷き裸足で歩きたし

田島　有吉　唐水

春眠や喘息の子をじっと診る

藤沢市　玄洋子

はなれ家の夕刻とるらし灯りまばたく

田熊　安部　ゆき

山寺のつつじも終り句の集い

茨城県　渡辺千恵子

お遍路と言葉かはしぬ石手寺

吉留　伊豆　湧泉

万緑の中に村風土然と佇み

宗像大社沖津宮祭祀遺跡

昭和四十五年度調査報告

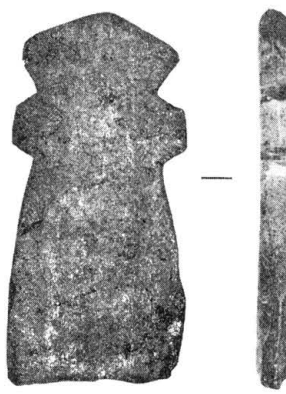
沖ノ島

偶々号や3号遺跡で発見された形代は御金蔵に再奉納され、いつしか本来御金蔵に属する遺物として認識されるにいたったものであろう。したがって滑石製形代は沖ノ島祭祀遺跡の構成では半露天にたる第三段階からわれはじめ第四段階にいたって流行したということになる。

滑石製形代は三種とも写実的な形態から、抽象的な形態へと簡略化の過程をたどったようである。人形は正面観で頭、上半身、下半身の表現をとり、各部は両側を刻りこんで区分される。本来平面な滑石をもってつくられるが、簡略化されて棒状のものもある。

馬形は扁平な石を使用して側面観を表わし、四肢はなく、鞍をつけた飾馬と裸馬の二種がある。両者とも次第に簡略化されてその特徴を失ってゆくことは人形の歩調を同じくしている。

舟形は船状の滑石を使用していて立体的に模写された幽節形のものから簡略化されて扁平板状のものまである。前者のとのつたものでは純礎が明瞭で上面には船室と甲板の別が彫刻されている。古代の祭祀に人形、馬形、舟形の形代を奉献することは沖ノ島に限られたものではなく、わが国各地からの遺品が発見されており、また古文献にも伝えられ、現在もなお神社において、或は民俗信仰儀礼において伝承されている。人形は馬形と共に土製品を道祖神に奉献したことが、明前風土記」にみえていて奈良時代には普遍的な祭祀であったと思われる。人身は本来海神に対する最も重い投供物であるという思想にもとずくものであり、その代替品として人形が発生したと考えられている。また、馬形は水霊と交わって生まれる竜馬伝説から転じて神が乗って天降ってくるという思想にもとずいて発生したものである。かくして神の好む供物として人形、馬形をあわせ奉献する風が海の神を、或は山の神を祭り行旅の平穏を祈る祭祀に普遍していった。舟形もまた宗像神社が海道を司どる、「道主貴」であったことを考えるならば、古代における頻繁な日韓・日中交渉にあたって海上交通を配することの加護を願ったのは当然のことであり、沖ノ島祭祀には欠かせぬ幣物となったのであろう。このような形代を奉献する祭祀方式はすでにわが国では6世紀代に土製馬形があり、やがて8世紀代には土製人形とあわせて流行したが、沖ノ島では号遺跡に先だつ5号、22号遺跡などに金銅製人形が奉献されている。このようなわが国古代祭祀思想の流れをうけて、8～9世紀代には遣唐使の往還という国家的行事のもとに、滑石製形代を奉献祭祀形態が定着したのであろう。



3、金属製形代

全国各地で発見されている6～7世紀頃の祭祀遺物に、土製模写品と金属製模造品とがある。沖ノ島では土製模造品の出土は全くみられない。5世紀頃から、すでに石製模造品と共に、鉄製模造品がわずかであるが、実用品の中に存在する。6世紀以降では、これに金銅製模造品が加わり、多種多様なものが他に類をみない程数多く出土してくる。ここで特に注目に値するのは、武器・工具類と性格を異にする金銅製形代類である。御金蔵出土と伝えられる金銅製機織機は別としても、機、梭、麻管、紡錘、縢、篋等の紡織機関係に関する形代類である。これらは、6世紀後半より10世紀代の遣唐使廃止にいたる。大和朝廷による国家的祭祀の終末まで続いて存在している。いずれも薄い銅板を切りとり、鍍金を施したものである。出土遺跡は、岩蔭および露天の遺跡で1号、5号、22号でありり、22号では、武器、工具類は存在せず紡織具が主体をなしている。このことは、伊勢神宮で行われている神衣祭に準ずる祭りを行ない、これら紡織具をして祭神への糧としたものである。「延喜式」神祇四、伊勢大神宮神宝にみえるがごとく、宗像大神に対しても同等の国家祭祀として奉献したものであろう。ただ紡織具と共に金銅製人形、高杯、小盌、細鋳鐸等の出土を見るが、これは職人の供献具とみることも出来るのではないだろうか。

以上のような形代類は、古社の神宝中に類似するものがある。伊勢神宮はもとより、熊野速玉大社、春日大社、鳥羽市神島の八代神社等であるが、他の各神社の神宝を調査すればまだまだ数多く発見することができると思われる。

古墳時代以降、各地の祭祀遺跡で土製・石製形代類が数多く出土していることは、農耕祭祀に対して衣服に関するまつりが、いかに大変であり大事なことであるかをうかがうことができる。

次に沖の島での出土例をまとめてみると、

【横】長方形の台座に上端は長短四本の分岐した角をつけ、その下方には左右2個の突起を有す。1号、5号、22号と竹出土す。伊勢神宮には金銅・銀銅のものがあり、八代神社にも同様なものが所蔵されている。

二宮佐天茲主人

四島一二三伝

――原田種夫著――

だいたい、レモンは、緑果の内に採果して四カ月地下室に入れておいて出荷するのがふつうなのだ。丘からレモン園を見下ろすと煙幕が濛々として異様な感じであったということだ。

しかし、四島青年は、レモンのことが気になってじっとしておれず、夜中にあちこちにおいてある寒暖計の目盛を懐中電燈で照らして見て廻った。なにしろ、広いレモン園のことだから大へんであった。

その時期には、四島青年は、ベットに入るときも、靴をはいたままで眠り、めったに風呂にも入らなかった。そしてひたすらに仕事に精魂を傾けつくしたのである。人に見てくれという働きではなく、仕事そのものを愛し、働くことに充分の生き甲斐をかんじたのだ。三十二貫くらいのものを平気でかついでいたというから、氏の体力もずぐれていたにちがいない。この時の筋肉労働が今日、八十六才にして、尚かつ鬘鑠として、第一線に活躍する四島氏をつくりあげたのであろう。

社長をプランチャードといい、総支配人をチッグといった。このチッグはなかなか優秀な人であって、外部から口がかかって引抜きにかかったことがあった。この人を引き留めるために、百万弗の株式の一割をこの人の名義にして引き留めたことさえある。ある時、霧が深くなってトロクスンの出来がわるくて暴落したことがあった。その善後策を相談された支配人は全米のトロクスン業者に手紙を出し、もうこの値よりは下がらない、下がったら補償するというPRをした。これがため値下りがストップしたために農家の人たちが助かるという一幕もあった。

とにかく、このサンタポーラ農園は、三百町歩もある世界一のレモン園だった。優秀なチッグ支配人の下でみんなよく働いた。祭日と日曜は休みで、それが重なると休みは月曜に廻し、アメリカ独立記念日はもちろん休みであった。

農園には、外国人と日本人のキャンプが別々になっていて、六畳の部屋に二人住むようになっていた。水道も電気もつく立派な部屋で、園内にはちゃんと売店もあって不自由なく、食事はこれまた清潔な広い食堂で、みんな朝、昼、晩ときまった時間にした。外人と日本人はそれぞれ仕事がちがい、外人は主として機械を扱い、耕耘機を動かしたり、レモンの樹に水を撒く仕事をし、日本人は手がよく利くので、剪定とか、採果、袋づめなどの仕事をした。日本人は仕事が早くぎちょうめんなので、この種の仕事にはうってつけだった。夜は謡曲をうなる人、碁、将棋などをする人が多かった。

こうした日本人の中でも、四島氏はまじめで よく働き、若いのに似合わず寡実な青年だということが、五十人くらいの日本人や、四百人くらいの外国人の間でも評判されるようになった。休日には、レモン園の連中は、そこからロスアンゼルスまで二時間も汽車にのって遊びに出かけた。そこにいる日本人は、二十五才から三十四・五才の男盛りなので生理的な欲求はどうにも制されなかったのだ。汽車に乗ったときから頭に女性を描いて興奮している状態であった。ロスアンゼルスには、公娼がたくさんいて、黒人もおれば、メキシコ人、ハワイ人と、いろいろの国籍の女性が肉体をひさいでいた。そして大ていが"ワンダラー、ワンプッシュ"つまり、一ドルで処理できたのだ。そういう場所に四島青年は一度も行かなかった、とかけば真赤な嘘になろう。若って血気さかりであり、頑健な体をもつ青年がそういう場所で生理的要求を果すのはあえて不思議とは申せない。

サンタポーラ農園の仕事は、四島青年にうってつけのものであったかも知れぬ。働くこと自体にひじょうな楽しさを感じ、はりあいがあった。

怠惰は人間の敵である。それは人間の肉体を眠りこませる。労働は人間の最善の友である。それは人間に新しい力を与える。

ーピーター・フオン・ポーレン

何かでこういう格言を読んだ記憶があるが、四島青年の考え方もこれと同じだったと思う。働くことに喜びを感じ、生きることに楽しさを感じた。同僚の二倍も三倍も働き、同僚の半分も休まなかった。そういう働きがいつの間にか同僚にわかり、外人の方も注目をするようになり、だんだんと、四島はよく働く男だと、四島はまじめな青年だという評価が形づくられていった。

その頃、サンタポーラ農園の経営責任者であった、岡山県人の某氏がいたが、この人は酒と女に身をもちくずして農園を去われてしまっていた。ある時、総支配人チッグに四島青年は呼ばれた。

「君一つこの農園の経営責任者になってやってくれないか」

と思いがけない申し入れであった。とっさのことで返事ができなかった。冗談にいっているのだと思った。まだ二十一や二の若僧に何をいうのか笑いたかった。しばらく返事をしなかった。

「とうかね。本気でいっているんだよ。若いけれど、勤勉な君ならうまくやれる」

「支配人さん、本気ですね」

四島青年は念を押した。

「ほんとうだとも。君を見込んで頼むだ」

青い目に真実がふくれていた。

「お言葉はうれしいのですが、なにしろわたしは、高等小学校の教育を受けただけなので、学問はないし、その上に教養も持たないと思います」

「そうしてくれ給え。」

総支配人と四島青年はしっかりと握手を交わした。

その日の夜、集会所にみんな集まってもらって、四島青年は、きょう総支配人から命ぜられて経営責任者に抜擢されたという話をし、自分としては学問もないし、皆さんを指導する力もない、果して四島青年を果しうるかどうかの自信すらない。皆さん、これは受けたが良いかどうか、自分は皆さんの意思に従いたいのできめてほしい、といった。

「賛成だ、賛成だ」

と皆は口々にいい、さかんな拍手が起った。それで事が決まり、若い経営責任者が誕生したのだ。

二十二才の若さであった。

十七才で憧れの米国の土を踏んでここに約五年、苦難にめげず、重労働に耐え、ひたすらに希望を明日にかけて生きて来た青年の努力は報をつけた。弱冠二十二才にして、労務監督者の地位につくことが出来、耕地三百町歩、従業員四百五十人の管理をすることになった。これは、異色の抜擢であったかもわからない。正直に精一ぱいに働いていると、その努力は自然と酬われるものである。仕事に励むということは、仕事それ自体を愛するということになろう。

――とは稲穂のことで田植えとともに早くもその豊熟を予祝したのである。

なお田植の神事は、古来諸社で行うところで別名田舞祭（宇都宮・二荒山神社、早苗振神社（安房神社）・御田祭（島根・物部神社）、水口祭（物部神社）等とも呼ばれているが、それらの中でも伊勢の朝田、熱田の夕田、高田（福島・伊佐須美神社）の昼田などは、大阪の住吉神社の田植祭と共に著名である。

諸社の例、多くは社頭に於いて祭祀を行い早苗を捧げて神田に至り、或は神田に神幸あって早苗を植女に授け、そして植女等歌い舞ってこれを植える。

このように或は歌い或は舞って植え付けてゆく優雅な姿は農耕儀礼の精華というべきであろう。

豊葦原の国日本にって田植神事は各種祭礼の本流ともいうべきものであり願わくばもう一度農耕文化の大らかで雄大な姿を再現したいものである。

田植えの今昔

田植神事はイネの豊作を予祝する神事芸能で御田植神事ともいわれている。これには田植祭や囃田（はやしだ）などといって、実際の田植えのとき、芸能をともなっておこなわれる神事と、おもに正月神事として田植えの所作を模して神意をなぐさめる田遊とがある。

田の神の降臨を仰いで播種した苗は何としても豊かな作を期したいだけに、その希望の表現は単なる祈りの言葉だけでは済まされず早乙女を中心に、或は歌い、或は舞うというような歌舞となって表現されるのが常である。

当社に於いても「正月二日御内田打神事」、「四月一日政所社田植神事」等がおこなわれていたが現在は行なわれていない。

特に政所社田植神事の記録によれば、「田神」の所役、苗草を用意する者、「田植」をする者、田植歌、神楽歌を歌う者をあらかじめ神職のうちより定めて行われた。田植に際しては美人の苗取子がありそのときの田植歌は、歌頭（音頭）をとって「富草ノ花"""。エアイコ"""」と各三回歌い、引きつづき歌峯という神楽歌を歌った。なお「富草ノ花